

第7回東北スポーツボランティアサミットin福島



2010年2月12日(土)～13日(日)

2005年、雪の山形からはじまった「東北スポーツボランティアサミット」、新潟・宮城を二順し7回目は福島県土湯温泉で開催されました。主催はNPO法人 うつくしまスポーツルーターズ

2月12日(土)

開会宣言 松崎和美さん(ルーターズ副理事長)

主宰者挨拶 副理事長 建藤洋悦さん 「うつくしまスポーツルーターズの紹介」

来賓 福島県文化スポーツ局 福井 様

日程についての説明

ルーターズ会員の特に熱心に活動された方の紹介 「2010年ありがとう会員さんの発表」



手作りの活動紹介
パネルで出迎え



ベストはルーターズの
正装、人気の的でした



基調講演：白石 豊氏 (福島大学教授) 「スポーツ指導の勘どころ～その技と心」

< はじめに >

ただいま紹介をいただきました白石です。スポーツにはする、教える、みるなどいろんな関わり方があります。私は10歳のときから体操競技をやってきました。あと数日で57になりますが、実に47年も体操競技に関わってきたこととなります。選手を26くらいまでやって、それから筑波大学の体操部のコーチをやってきました。(その意味では)まずスポーツをするということをとことんやってきたこととなります。

1988年くらいから、トップアスリートがメンタルトレーニングをしにくるようになりました。私の専門は2つあります。まずスポーツ運動学で技術はどうなっているのかを開発するようなものです。もうひとつは18の頃から独学で勉強して今に至っているスポーツメンタルトレーニングです。年間に数多くの講演をしますが最

近の依頼は圧倒的にメンタルトレーニングが多くなっています。ふたつの専門を持つことは珍しくヨーロッパの仲間もとっても不思議がっています。

活動としてはバリバリの指導者です。教師でもあり、コーチでもあり続けているのです。そこでスポーツを教える、ということ、するということについての一端を話したいと思います。



< 違いを生み出す、違いを見抜く >

男子体操は五輪5連覇をするなど19年間世界で負けないというものでした。私は東京オリンピックを見て鉄棒ってすごいと驚いたものです。東京五輪で16個のメダルをとったのですがそのうち10個以上が男子体操だったのです。私はこう考えました。野球をやっているも(当時は)日本の中だけですが体操をやったら世界にでられるのではないかと。その次の日からバク転をやりたいなと思いました。ちょうど、1964年の東京五輪のころ、隠密剣士という番組をやっていて、相手が切りにかかってくるとバク転をして逃げる。本当はそのまよけたほうが早いのですが。(笑)それと東京五輪の体操の活躍に影響を受けて親に内緒にやろうと思ったのです。頭に枕を括り付けてマットの上で練習しました。すると子どもは身が軽いから2日ほどでできるようになりました。学校のグラウンドでぼんぼんとバク転をやったものですがいつかは五輪に行きたいなと思いました。中学の先生に相談したところそれなら東京教育大学へ行けと言われました。国立大学で唯一体育部があるということでその大学を出れば、と思ったのですが、幸い入ることができました。

そこで体操10連覇を支えた金子明友という福島県の須賀川出身の先生にお会いしました。自身1952年、ヘルシンキ五輪の選手でその金子先生に10年教えてもらいました。入学した年の10月のこと、ものすごくショックなことがありました。「みなさん前回はできますよね?」もともと私は宙返りとかやるので、金子先生の器械運動を教える授業が始まったときには「よ~し、この半年は楽勝だ」と思ったものです。宙返りができる人間には前回は楽勝だと思いました。先生は神様でした。その前で体操部出身の前回りをやりました。すると今からこいつをできなくするから、と神様がいうのです。ボールのように丸くなると前回りできる、と指導します。「では小さくなれ」といわれ小さくなったところでそのままでは動きません。すると、先生が力を入れて転がすのです。「ボールは物体で人間は肉体です。自分でエネルギーを発揮することで回ることができる。スポーツ指導者でこのことを理解しない人が多く一生懸命練習だけする。「それだけではだめ」と先生はいうのです。

「先生なんでも仕組みがあるんですか」と聞くとそうだといいます。そのコツを専門では技術というのだそうです。それはいっぱいあるのかというと、月面宙返りでも実は3つ程度しかないのです。その世界最先端の技術を3つ知っていれば、世界最高のことができるといわれました。それからの授業は世界最先端の技まで教えてくれるのですから毎日毎日面白く感じました。

次に18歳の時に体操部に入って出会ったのが東ドイツのスポーツ運動学でした。当時、ソ連がメンタルトレーニングをやり始めていて、寝室のベッドに寝ながらできる。行き帰りのバスの中でイメージ使って練習することができました。その頃、日本でイメージトレーニングできる人はいなかったものですから現在私は運動学、と、メンタルトレーニングの両方を専門にしているのです。

< 常識のうそ >

スポーツの神話には思い込みや常識のウソがいっぱいあります。逆にきちんと分析すると、すべての運動にはコツ(技術)があるのです。例えば人間は年をとります。するとスポーツや体育の指導者は若いうちしかできないといわれます、しかし、自分でやってみせなくてもできるはずだと思うのです。(もう少し具体的な例を話すと)

先生になりたい人が大学にきます。小学校の教員採用試験には、マット、鉄棒、跳び箱ができないといけない

のですが私は学生にちゃんとしたことを教えてくれる先生になってほしいのです。毎年（そうした学生が）80～100人きます。すると小学生5,6年の体のきく頃はできたが、大学生になると前まわりができないのです。私はできない学生たちに90分のうちに必ずできるようになるといいます。それを白石マジックといわれていますが、実は金子マジックなのです。その様子を映像でみていただきましょう。

（映像で学生が前まわりができない様子を紹介）

福島大学の体育科の学生が鉄棒の前回りができない。映像の中で「やべえできないと」言っていましたね。では顎をうえにあげて胸を張る。そして足は曲げます。前に回転して鉄棒の真下に来たときに、一気に丸くなるのです。すると大半が前まわりができます。つまりあの子たちは筋力柔軟性は十分あるはずなのに、（コツが）わかっていないことになります。跳び箱も同じです。一度も飛べない子がいます。それが10分で飛べるようになるのです。するとみんな泣くんです。普通大学の授業で泣くでしょうか？こういう思いを体育でやって体験させてくればできない人たちよりもよっぽどいい勉強になるのです。私はどこが問題か見えたら、教えられます。それは車いすになっても教えられるでしょうしそこに鉄棒がなくてもできると思います。私はヨガを25年やっているのに、64kgで固定して、何でもまだできますが、実はよくできる人が教えられるという人ではないのです。では、どうやって見抜くかですが、問題意識をもってみることにプロセスを見るのです。ゴルフのプロたちはナイススイングという。ナイスショットとはいわないのと同じです。結果ではなく、働きをみる。DMD (difference makes difference)をみるのです。跳び箱でなぜ3段飛べないのか。こちらに教える技があったら感嘆にできるということです。



白石さんは身振りや実技もまじえ
そして映像も交えてわかりやすく
説明してくれました。
過程を大切にし、コツを裏づけを
もってしっかり教えればだれでも
できること、さまざまなものに
共通するものだと思います。

<人間の教育と動物の調教>

東京教育大学での話しですが選手が素晴らしかったので、私が卒業後コーチをやったところすぐに日本一になりました。本当にがむしゃらにやって超ハードトレーニングを敢行してやったのです。当時とくに東京五輪以降はスポーツ根性アニメがいっぱい流行ったものです。巨人の星、大松さんのバレーボールもそうでした。多くの人がそれがスポーツと思い込んでいたのです。「栄光は血と汗と涙とれ」と。私は今まで4時間だった練習を6時間やりました。その結果選手が良かったのだと思いますが勝ったのです。初めて胴上げしてもらってそれは嬉しかったものです。あの感激があるので今でもコーチをやっている気がします。しかし、今から考えるとひどかった。右手に鞭。全く調教でした。その流れで1985年まできて30歳になったころです。何せ5年で3回も全国優勝をとりましたから、私の鼻はピノキオの鼻のようになっていました。そこでであったのが83歳の澤田先生のヨガの技術だったのです。ちょっと映像でみていただきましょう。

（ヨガの澤田先生のビデオ）

見ていただいたのは身体を温めるポーズといえます。足を組んでいるところが枕になって、背中がベッドになっている。関節がしなやかでないといえませんがそれは毎日、毎日の積み重ねなのです。お年寄りでも絶望しないでぜひやってもらいたいと思います。先生自身大阪大学をお辞めになるまえ62歳ではじめたといえます。私はそのことを知りお宅におうかがいして2時間くらい教えていただきました。そのときにこういわれました。「教育はeducation。語源は何かというとeducareというラテン語で引き出すという意味があるのだ」と。「あなたは（コップを持って）選手や子供や生徒は空っぽだと思っていないか。educareは引き出すだよ。選手や子供や生徒はいっぱいいろんなものを持っているんだから教える矢印は反対じゃないの？右に鞭。左に飴。言葉の暴力でがんがんやっていないか。」と言われました。

実はこんな体育やスポーツの指導をしている講師はやまといえるのです。私が校長をつとめている学校が中体連に参加するといっているので、校長ということで見に行ったときのことで、福島市の中体連で私の務めている付属中

は10種目見に行ってくごとく全部一回戦負けでした。見てると力がないわけではないのです。ちゃんと教えてもらってないのです。女子バスケットボールのことです。よく見ていたらひどいことが起こっていました。教える教師も授業中あんな言葉でやってないはずなのですが、15:30以降、鬼になるのです。今、オリンピックのコーチはそんなことはやっていません。私はまだこんなことやっているのか、こいつらはと思いました。そこで1年間、先生たちに教え方を教えたのです。そのときにうちの先生に言っているのは、一切どなるな、ということ。どなると本当にスポーツが好きな子供、生徒が出てこなくなる。人が出てこなくなるのだと。85年に、私にはそれがわかったのです。一方でアメリカで75年にコーチングというコミュニケーションスキルのさまざまなものが出てきていて、時代は教え込むから引き出すに変わってきていました。

ゾーンというのはトップアスリートがよくいう言葉です。ゴルフのメンタルトレーニングで、デビットグラハムがやりました。非常に好調だったときに1番Tショットから、何も覚えていなかったといいます。ビデオをみたら、神がかりの状況だったということで、そのゾーンに入るためにいくつかの研究をしたといいます。

<私が見た岡田監督>

初めてあったのは2007年4月のフローマネージメントセミナーで天外伺朗さん(土井とたださん)が講師でした。1回4時間×6回。定員80名のセミナーで先生来ませんかと声がけをいただいたのです。金額は80万円。行けるわけがないだろうと思いました。しかし招待状が届いたのです。ところが開催される日は木曜日でした。それは授業の日で私は30年間休んだことはありませんでした。今大学の先生はよく休みます。学生も休講通知が出ると万歳といたりするのは実は日本だけです。アメリカや欧州は、自分で稼いで通っているので、振り替えはいつやるのかと迫られるといいます。教える方も教わる方もいい加減なのは残念なことです。さてセミナーですが4月3日、木曜日は講義が始まる前の時期ということで大丈夫でした。最初だけ行ってごあいさつできればいいかと思って参加した際に隣に座ったのが岡田さんでした。岡田さんに名刺をだしたところ、今は無職でリクルート中ですとのことでした。88年のフランスW杯の監督を勤め、横浜の監督になり1,2年でマリノスを日本一にしました。しかし、その3年目になると、選手たちが指示を待ち早く教えてという姿勢になったといいます。背筋が寒くなり引き出すことが重要だと考え自由にやらせてみたそうです。しかしやり方を知らない人に、自由にやらせたらダメなんです。基礎、基本をきっちり教えていなかったためチームはダメになり3年目、8位まで落ちました。そこで2006年に監督をやめて、選手が自分で考えてやれるように身についたら、秘密のカギを見つけたら監督をやろう、と思ったといいます。その後私がドイツに客員教授をやりにいきインターネットで日本の新聞をみたら、オシムさん倒れた。岡田さん監督になるという記事がありました。秘密のカギが見つかったのか、と思い日本に2008年の1月に帰ってきました。さて、ワールドカップの予選の映像をみていただきます。

(ビデオ)

ワールドカップでベスト4という高い山をめざす3次予選、バーレーンに負けました。そのときに選手が生き生きとしていない。なんでこんな試合をさせてしまったと岡田監督は悩みます。2008年の6月末にアジア3次予選を終え、9月から翌年のアジア最終予選に突入するときにはこれでは日本はW杯に行けないと思ったのだそうです。そんなときふっと、私の顔が浮かんだということで相談事があるという連絡をもらいました。「3次予選を半年戦ってみて、選手の闘争心が足りない。ブラジルなんかはお金に関係なく闘争心を出す、日本の選手はおとなしい。世界最高の豊かさのせいか」と聞かれました。次にちょっと考えたことがあるので、聞いてほしい。「オールブラックというチームがある。ハカという儀式をやる。闘争心を湧き出させる。これをやらせたらどうかと思った」というのです。私はそれを聞きそれよりもやることではないか、と思いました。日本の選手というのは世界の選手に対しものすごくコンプレックスを持っているのではないかと私は(強い)体操競技をやっていたから、なんのコンプレックスを持っていませんし、日本人だから勝てない、というのは大嫌いです。そういうところから直さないからダメではないか、明日東京で会いますかと言いました。その90分なんてあっという間でした。すると監督が「先生時間が足りない」ということで2008年8月26日に福島大学で6時間の対話がありました。

そのときのことを映像でみていただきます。

(ビデオ)

白石「なぜ日本は個(個人技術)では勝てないと言うのですか」

岡田「それは勝てない。組織で勝つんです」

白石「なぜ勝てないのですか？」

岡田「勝てない」

白石「メッシのドリブル、なぜ日本選手にできないのですか？(体操は)世界で勝つために、世界で誰もやっ

てない技をやって、毎年毎年考えて勝ちました。技で勝たなくて、この国が世界で勝てるわけない。1964年の東洋の魔女は回転レシーブしてソ連に勝ちました。」

松平は男子バレーを強くしました。ミュンヘンで勝つために日本中で身長の高い選手を探しました。195cmの大古を入れフライングレシーブ、Aクイック、Bクイックなどを日本は生み出したのです。SONYだってホンダだって全部、技術です。日本は坂の上の雲を一度目指しました。その結果植民地にならないで済んだ。30年で清に勝ち日露戦争でロシアに勝ってしまうのです。その後の第二次大戦後、経済で世界で勝負しようとして経済成長を遂げました。それは第二の坂の上の雲であり、Japan as No.1 でした。今の学生たちはすごい勢いあったところを知らず日本が勢い失った頃に育っています。でも我々は1954年に生まれたから知っています。テレビもない、電化製品なんてない時代から肌で国がガアッと上がっているのを知っています。私ができるのは人をつくっていくことで体育、スポーツという場で人を作っていくしたいと思います。昨年あのW杯が日本にどれだけ日本中に勇気をくれたかわからないです。

我々の話は一貫して、どうやって日本をゾーンに入れるかでした。個で勝つ、走りで勝つ、球際で勝つ。そしてゾーンにどうやって日本が入るか。5月21日の日韓戦で韓国に負けたときどうだったかですが、日本では、マスコミが全部つぶしていく傾向があり売ればいい、という感じでやっています。W杯でもそうでした。韓国戦のあとは岡田監督でいいのかという論調ばかりが流れていました。その後スイスへいったときにすごくいい感じにチームがあがってきたと聞きました。そこでW-cupの開会式の朝の地方紙に私は「岡田監督はぶれていない」とコメントしました。3日後、夜中の1時半にカメルーンに勝ったのです。それからは自宅の電話が鳴りっぱなしでした。しかし、岡田さんのストレスを私がカバーしたわけではないのです。「個で勝つ」ことを作ったことが（結果ベスト16進出の）大きな要因だったのです。その意味でW杯のあと、長友は世界一のサイドバックになるんだと言いましたがインテルがとったことは実に痛快です。本日は私の2つの専門である運動学とメンタルの世界の両方を伝えたいつもりです。綿しは今後もずっと現役でいるつもりです。どうもありがとうございました。

分科会 1

参加の意見や情報交換のために9つのテーブルに分かれて自己紹介、活動の課題を出し合いました。どのテーブルでも活発に話し合いがなされ、最期はそれぞれの内容を代表が発表しました。



このあと一旦解散し参加者はチェックイン、部屋で荷物をほどきそれぞれ温泉に入る人、部屋で話すひとさまざまです。



懇親会

18時半からの懇親会、主催者からのメッセージのあと、席ではさまざまな意見や情報交換が始まり、やがて正面の演壇では地元の昔話から各地のボランティアの紹介がにぎやかに始まり時間はあっという間に過ぎていきました。



左から山形・新潟・秋田・水戸のボランティアが並ぶ光景、自然にすごいことだと思います。右は主催者の齋藤さん、多分酔えなかったと思いますが本当にご苦労様でした。



栃木のトリオがレモン牛乳製品をアピール / 新潟と秋田の会話はなんだろう / もちろんごちそうもありました



水戸と仙台の交流 / ひとりで参加したのは岩手・水戸・埼玉から / 主催者福島的女性のみなさん



懇親会の参加者、とまあみんな元気です。

二次会

自然に（でもないか）新潟の皆さんの部屋に集まったのは20人以上、深夜まで特に「今後の東北サミット」についてたくさん意見交換ができました。想いの分だけきっといいものになりこれからも続いていくのでしょう。



二次会絵図



どこのボランティアなんて関係ないのだ

2月13日(日)

第7回東北スポーツボランティアサミット パネルディスカッション 9時半～10時半

テーマ「スポーツボランティアの楽しみ方・生かし方」

齋藤道子さん(コーディネーター)

チームを超えてやっているボランティア(ルーターズ、宮スタなど)とチームのボランティアは違うのではないのでしょうか。一方でどちらも楽しさや魅力を感じているから続けているのではないかと、思います。一番の楽しみはなんのでしょうか。

泉田 (市民スポーツボランティア SB2004/宮城)

どうしてボランティアをやっているのか、と聞かれるときに、多くの方が楽しいから、と答えています。楽しさはなんだろうということですが、それこそ両手両足を突っ込んでボランティアをやっている人もいますが、いくつかに分かれるのではないかと思います。プロスポーツでいえば、チームと一緒にいて、支え応援してチームとの一体感で楽しんでいる気がします。毎年やっているボランティアアンケートでなぜボランティアをやるのか、という質問では仲間ができるから、という答えが多いようです。また社会につながる活動として仙台でエコの活動をしていますが、社会貢献も活動の目的になっています。

齋藤

1つめのチームのそばにいられるというのはチームボランティアの特徴でしょうか。仲間が増える、社会に貢献できるというのはルーターズに近いと思います。満足度が高い活動とは何でしょうか。

佐藤磨美 (うつくしまスポーツルーターズ事務局)

野球が多いですね。また、マラソン、ウォーキングというと同じ人が手を挙げる傾向があります。

齋藤

ルーターズの場合は活動する人が自分に合うか合わないで活動を決めるようです。チームボランティアではほぼ同じポジションになる、という人はどの程度いるのでしょうか。(手をあげてもらおう、結構あがる)

結構いる感じですが手をあげなかった秋田の阿部さんはどうでしょうか。

阿部 (秋田SVハピネッツ)

各ポジションを回って声をかけて歩くことが多いです。

齋藤

ポジションを固定する人も多いようですが、そのポジションで満足しているのでしょうか。

栗原 (水戸ボランティア)

現場監督のような役割が良いと思います。

齋藤

ボランティアというのはアルバイトでもないし、スタッフでもないし、使う側はどう考えるのでしょうか。

熊倉 (湯のまち飯坂マラソン事務局)

マラソンの場合、正直言うとうまく使っていない、というのが本当でしょうか。何をしてもらったらいいか私自身が混乱しています。ルーターズの方が経験があるので、教えられるといいかなと思います。毎年一緒にやっていただくと本当に助かりますし団塊の世代の人たちがボランティアにやってくれるといいと思います。

齋藤

ボランティアは思っている以上に役に立つというのがある。泉田さんのところは継続的な活動をやっていて、一歩先をいくのではないですか。

泉田

スポーツボランティアという言葉はそんなに古くないと思います。チームが好きだから支えているということでサポーターともいえます。そのためアウェイに行くと応援するという人も多いようです。ボランティアと主催者とどう打ち合わせていくかということが重要で、任せられることに喜びがあるでしょうし、ボランティア一人ひとり持ち味を引き出せたらいいと思います。

齋藤

適材適所というと、ルーターズのように一日だけの場合は、それができるかどうかですが、依頼者との打ち合わせについてどうですか。

佐藤

マラソンをしている人に直接応援するというのもしてみました。応援ウォーキングボランティアには歩こう会に関わっている人をお願いし歩けない人は給水ボラをしていただいたことがありました。

熊倉

茂庭という山の中で応援する人が全くいない。そこで応援ウォーキングというのを始めました。

齋藤

観客から見た、スポーツボランティアの位置づけはどうでしょうか。

泉田

まだ社会的によく知られているわけではないと思います。観客からみればチームのスタッフの一員だと思っているのではないのでしょうか。

齋藤

試合見てはいけないのですか？

金島（仙台89ERSボランティア）

休憩時間にウェアを脱げば見ることができます。

栗原

前半か後半かに自由にみられます。

齋藤

ベガルタ仙台にいくとボランティアとスタッフの見分けがつかないがどうですか。

泉田

多くのスポーツでボランティアの情報は表にあまり出ていないので、どうしても知られることが少ないようです。

齋藤

ボランティアに出ればちょっと楽しいことがあるということはないですか。

佐藤

依頼団体にはグッズとか何か記念になるものをお願いしています。

齋藤

お金を払っている大会ではスタッフとみられるしお金を払っていない大会ではボランティアとみられる傾向はないのでしょうか。鈴木さん、ボランティアへの不安とかありませんか。

鈴木（福島ユナイテッドFC / 昨年までベガルタ仙台スタッフ）

ベガルタ仙台ではボランティアを使いづらいという発想はありません。会社とかクラブ本体ではなく、周りが支えてきたというものがありました。ボランティアの数は種々変わるが、リスペクトし極力、気持ちよくやっていただくという考えでした。

齋藤

リスペクトを形にしているのですか。

鈴木

すぐにはぼっと出てこないが、社長以下、感謝の気持ちを表し続けていました。

泉田

プロスポーツボランティアをやっていると常に活動の中で何か形のあるものを貰いたいという風土はたぶんなくて気持ちの部分が大きいです。

佐藤

ルーターズ全体が何か頂戴と言っているわけではないので誤解がないように申し添えます。。

齋藤

次にボランティアの数の問題について考えたいと思います。

熊倉

どういうふうにしたら、もっと積極的にボランティアの応募があるのでしょうか。

齋藤

スポーツボランティアは垣根が高い感じを受けるのでしょうか。新潟ではどうですか。

伊藤（新潟アルビレックスBBボランティア）

新しい人が入ってこないのは新潟の課題です。新規の人が入っても継続する人が非常に少ない。継続する人がだんだん減っているのです。そのためボランティアがボランティアを探してくる、という状況になっています。

栗原

半数はサポーターとなっています。北関東ダービーをやっている栃木には絶対に負けたくない。チームを勝たせるためにやっている、という気がします。

泉田

過去の事例でいえばメディアを通じてボランティアが足りない、ということを正直に発信すると、集まるかもしれません。

熊倉

上から目線がでるとボラはいなくなる。男女関係なく、同じ目線でやりましょうということはどうでしょう。

齋藤

高校生の子も、ボランティアの意義を考えているのが良かったと思います。この後の分科会で、ボランティアハンドブックを加筆修正してもらう予定です。最期に一言ずつ。

熊倉

参加させてもらってよかった。実際わからないことだらけですが年代に関係ないというのが最高です。

泉田

ボランティアは出来れば試合とかその日だけではなく、地域とスポーツイベントをつないでいく存在であるべきだと思います。

佐藤

チームのためのボランティアと熱く語っているのを見てルーターズもそうなりたと思いました。

分科会 2

前半では「東北スポーツボランティアサミットのこれから」について、内容ややり方、開催時期をポイントに話し合いました。



今後の東北スポーツボランティアサミットについての主な意見

【運営方法と内容について】

各地の活動を知り参加者同士が交流できる場に

- ・ 交流と親睦を中心とし、イベント性の強いものよりも事例発表や意見・情報交換を中心にした(多数意見)
- ・ 主催者に負担がかからない形で行う
- ・ しばりを設けず主催する地域の特徴をだしても良いのではないか
- ・ 参加者の参加負担が少ない形を希望

【開催時期について】

中心は2月開催、秋(あたたかい時期)という意見も

- ・ あたたかい時期(特に秋)
- ・ サッカーなど多くのスポーツのオフである2月 (多数意見)

【その他参考意見】

- ・ ビジョン、目的をはっきりとすることが必要
- ・ 新しい人を受け入れやすく、新しい人が参加しやすく
- ・ 数年に一度はイベント的なものも良い

分科会の後半では「うつくしまスポーツルーターズ」のボランティアハンドブックを見て、修正・加筆すべきところを中心に話し合い、最期にグループごとに発表しましたが、前向きで積極的な提案が多くいただきました。



だされた意見も参考に新しい「ボランティアハンドブック」が作られるとの事、拝見するのが楽しみです。

最期に、分科会の前半の意見も参考に第8回となる「東北スポーツボランティア・サミット」は来年2012年に秋田で開催されることが決まりました。まずは元気で活動した皆さんの想いをもって再会したいと思います。福島開催のために準備いただいた「うつくしまスポーツルーターズ」の皆様、本当にありがとうございました。

【さみっと点描】



温泉地での開催ということで旅館のロビーや温泉街のそば店の店さきにも足湯がありました。

会場の片隅には主催者の皆さんが用意してくれたお茶などのコーナーがいつもありました。

